

韓国の天理教における入信の過程とその分析 : おもに月刊機関誌の記事を中心として

著者	陳 宗?
雑誌名	東北宗教学
巻	8・9
ページ	59-77
発行年	2013-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/60969

韓国の天理教における入信の過程とその分析

——おもに月刊機関誌の記事を中心として——

陳 宗炫

キーワード 入信、韓国、天理教、機関誌

はじめに

回心に関する研究は欧米で始まり、キリスト教を背景とするものが多数を占めてきた。とりわけ、このテーマは20世紀の初頭から、アメリカの宗教心理学の研究領域において重点的に取り扱われてきた。したがって、回心に関する研究成果を繙くとき、初期の回心研究にはこのような文化的要素が含まれていることをよく認識しておく必要がある。宗教研究者も、みずからが属する文化的な諸前提から完全に自由になることができないからである¹。それゆえに、非キリスト教文化圏にそうした研究成果をそのまま適用することには無理があるといえるであろう。このことは、英語の“conversion”の訳語としてよく用いられる「回心」が、宗教全般にみられる普遍的な概念ではなく、特にキリスト教伝統に関係する脈絡の中で頻繁に使用されてきたことから確認できるであろう²。

本稿では、韓国内で日系新宗教の一つに分類される天理教において、「信仰の道に入る」とか「信仰の始まり」といわれる、いわゆる「入信」に注目しながら、その入信過程を分析することを研究目的とする。韓国における天理教の動向を理解するためにも、まず、天理教の世界観とともに、異文化である韓国における展開を史実と照らし合わせながら予備的に考察しておきたい。天理教は日系新宗教の中で、最初に韓国布教を行なったことで知られる。また、日本

1 井上順孝・島蘭進1985「回心論再考」上田閑照・柳川啓一編『宗教学のすすめ』筑摩書房、87頁。

2 徳田幸雄2007「訳語『回心』のルーツと展開」『東北宗教学』（第3号）東北大学宗教学研究室、11頁。

による植民地支配が終わった後も、韓国人信者によって再建され、教勢を伸ばした数少ない日系新宗教の一つである³。とりわけ、早い時期から教団の取り組みにより韓国人布教師が養成されたこと、原典の翻訳により儀礼が韓国語で行なわれるようになったことは注目に値する。前述のことを踏まえたうえ、韓国人によって設立された現地教団である「天理教韓国教団」が発行している月間機関誌『道友』に掲載された「教会探訪」の記事内容を手掛かりとしながら、韓国人天理教信者の入信過程とそれに影響を及ぼした要因を明らかにしたい。

1. 天理教の教義と信仰

天理教は、大和国山辺郡庄屋敷村（現・奈良県天理市三島町）の中山家ではじまった。天保9年（1838）10月23日、天理教の教祖となる中山みき（1798－1887）の腰、夫・善兵衛の目、長男・秀司の足に痛みがあり、それらの痛みを治すために寄加持が行なわれた。ところが、加持台の女性が不在であったために、みきがその代理を務めることになった。その祈祷の最中、「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしるに貫い受けたい」⁴との神による啓示の言葉があった。善兵衛は再三言葉を尽くして辞退したが、神は厳として退かなかった。押し問答は3日間に及び、ついに善兵衛はあらゆる人間思案を断って、神の啓示の言葉に従う旨を答えた。時に天保9年（1838）10月26日のことであった。この日を天理教では「立教」としている。啓示を受けて「神のやしる」⁵になった後のみきの生は「ひながた」と称され、天理教信者にとって信仰の模範となっている。

教祖は明治20年（1887）陰暦正月26日、90歳で「現身（うつしみ）をかくした」⁶が、教祖の魂は、人間が神によって創造された元の世界、すなわち「ぢば

3 이원범편저2007『한국 내 일본계 종교운동의 이해』제이앤씨, 24-50頁。

4 天理教教会本部編2001（1956）『稿本天理教教祖伝』天理教道友社、1頁。

5 天理大学おやさと研究所編1997『改訂天理教事典』天理教道友社、550頁。

6 天理教では教祖が「現身をかくされた」と表現し、身体は見えないが、存命であると信じられている（天理大学おやさと研究所編『改訂天理教事典』、79頁）。

(奈良県天理市内)」⁷において、いまも存命でとどまって働いていると信じられている。ちなみに2011年現在、教会数16,825、布教所数17,302、教師数157,206名、信者数1,119,652名となっている⁸。

1-1. 天理教の神概念—「神」・「月日」・「をや」—

天理教では、「親神・天理王命」⁹を信仰の対象としている。天理教には三つの原典¹⁰があるが、教祖・中山みきが自ら執筆した『おふでさき』¹¹において、神は「神」-「月日」-「をや(親)」と語を変えて説かれている。これは、教えを聞く人間が神の守護を理解しやすいようにとの配慮からであるとされる。まず、「神」については、当時の人々に親しまれた語でもって親神の守護が説かれる。親神は拝み祈祷の神ではなく、この世界を創造し、現在も変わることなく守護している根元の神(「元の神」)かつ真実の神(「実の神」)であることが教示される。次に「月日」の語によって、この世界が神の「からだ」であり、月と太陽は神が天に現れた姿であって、この世界を分け隔てなく温みと潤いをもって万物を守護していることが教示される。さらに「をや(親)」の語によっては、親神が人間にとって根源的な「をや」であり、親神と人間が「親と子」の関係¹²にあることを意味する。さらに「をや」の語には、教祖と「ちば・かんろだい(人間創造の元の場所と、その場所に人間創造の証拠として据えられている台)」という意味も込められており、「親神と教祖とちばが、その理一つ」であることも教示されている。

7 天理教の教義における人間創造の場所。

8 文化庁編2013『宗教年鑑』ぎょうせい、86-87頁。

9 本稿における「親神」と「神」は同義として天理教の祭神を指す。

10 天理教の聖典。『おふでさき』『みかぐらうた』『おさしづ』の3書がある(天理大学おやさと研究所編『改訂天理教事典』、306頁)。

11 教祖により、明治2年(1869)より明治15年(1882)に至る14年間にわたって書かれた。17号1,711首の歌からなっている(同上書、130頁)。

12 神は人間を創造し、その働きによって絶え間なく守っているとされる。人間からすれば神は親であり、神からすれば人間は皆子供であると天理教は説いている。

1-2. 天理教の人間観

天理教の教義によれば、親神は人間が「陽気ぐらし」をするのを見てともに楽しみたいとの思いから人間世界を創造した¹³。「陽気ぐらし」は親神にとって人間創造の目的であり、人間にとって生の目標であるとされる¹⁴。これが人間の「元のいんねん」¹⁵であると説かれる¹⁶。「陽気ぐらし」とは陽気な心、すなわち明るく勇んだ心で日々を通ることであり、その実現のためには、親神の守護によって生かされて生きていることに目覚め、日々、生起することがらに込められた親神の思いを悟りとることが求められる。したがって、日々の生活の中で、心の「ほこり」（自己中心的な心遣い）を払い、心を澄ますことが肝心であるという。このように、神意を悟り実行する努力と神への報恩・感謝によって、心は浄化され、人は「陽気ぐらし」を実現していくのである¹⁷。

1-3. 天理教の救済方法—「つとめ」と「さづけ」—

天理教における救済方法は、教祖により「つとめ」と「さづけ」が教えられている。「つとめ」はそれを実行することによって、病や悩み苦しみのたすけばかりでなく、「陽気ぐらし」世界の実現を祈願するものである。「つとめ」は「かぐらづとめ」「かんろだいづとめ」「よふきづとめ」「たすけづとめ」という4つの呼称によって説かれる。「かぐらづとめ」とは、親神の人間世界創造の理をかたどって、かぐら面を使用して勤められることから、このようにも表現される。「かんろだいづとめ」とは、ちば・かんろだい（甘露台）¹⁸を囲んで勤められることを意味する。また「よふきづとめ」とは、十人のつとめ人衆が親神の望まれる「陽気ぐらし」を表し、陽気ぐらし世界の実現を願うことから、このように表現される。さらに「たすけづとめ」とは、「よろづたすけ」のために勤修されることから呼ばれる名称である。

13 天理教教会本部編2009（1949）『天理教教典』天理教道友社、92頁。

14 澤井義次2011『天理教教義学研究』天理教道友社、57頁。

15 天理教の教義に基づいた解釈で理解するために、「いんねん」は平仮名で表記する。

16 天理大学おやさと研究所編『改訂天理教事典』、63頁。

17 同上書、928-929頁。

18 神によって人間が創造されたとされる場所に据えられている。

この「かぐらづとめ」の理を受けて、世界各地の教会においても、地歌と鳴り物はそのままで「つとめ」が勤められる¹⁹。「陽気ぐらし」世界実現のために、教祖が教えたのが「つとめ」を勤めることであり、天理教の信仰において最も重要なものである。「つとめ」の実行をとおして「いんねん」の切り換えが可能になるとされる²⁰。また「つとめ」が「よろづたすけ」の道として教えられるのに対して、「さづけ」は「身上たすけ」の道として教えられる。それは病む人をたすけるための手段として、親神から渡されるといわれるもので、これを身体を患っている人に取り次ぐと、そこに親神の不思議な守護が与えられるという。つまり、「さづけ」も「つとめ」とともに、天理教における救済手段の一つである²¹。

1-4. 信者の属性

天理教の教義によれば、親神は人間に「陽気ぐらし」をさせたいとの思いから、人々を病や悩み、苦しみという「てびき」とおして信仰へと導かれるという。「てびき」によって信仰の道に入ること、信仰の始まりの意味として「入信」がある²²。ここでは、天理教で説かれる用語を手掛かりとして、天理教における信者の信仰的段階について簡潔に叙述したい。

天理教でいう「信者」とは、「天理教の教義を信奉する者」のことである。また信者の中でも「よふぼく（用木）」²³とは、「別席」²⁴をとおして「さづけの理」を受けた者のことである。「よふぼく」は「陽気ぐらし」世界の実現のための用材として、日々、信仰に生きる。「きょうと（教人）」とよばれる立場は、「よ

19 澤井義次『天理教教義学研究』、121-122頁。

20 天理大学おやさと研究所編『改訂天理教事典』、64頁。

21 同上書、521頁。

22 同上書、721頁。

23 「陽気ぐらし」世界の建設を、建物の建築にたとえ、布教伝道にあたる者をそのために使用される用材としての「用木」に見立てた言い方である。天理教布教伝道の場における人材を意味する（同上書、931頁）。

24 教会本部で、月に1回ずつ総9回、取次人から、(決まった内容の)親神の教えを聞く制度。繰り返し話を聞くことによって心が洗い清められ、生まれかわったような心になる。こうして生まれかわった心に「さづけ」が授けられる（同上書、815頁）。

ふほく」の中で、教人資格講習会を修了し、教人登録をおこなった者に与えられる²⁵。

1-5. 天理教の組織

教祖は信仰者たちに早くから講を結んで信仰に励むように教示した。教祖の在世当時から、自然発生的な集団として講が結成された。しかし当時、明治政府の法律が信教の自由を認めていたにもかかわらず、天理教の講は政府公認の信仰団体ではなかった。そのため、明治政府から厳しい迫害を受けた。天理教は教祖が「現身をかくした」後、明治21年（1888）にようやく教会が公認されて、「ちば」に教会本部が設けられた。その後、教勢は全国へ急伸展して、三百万余の信者数になった。ところが、明治29年（1896）に内務省訓令によって、教義と祭儀の変更を余儀なくされた。しかし実際には、教祖が説いた教え、「ちば」を中心とした信仰は、それ以前と同じように、人から人へと伝えられていった。明治41年（1908）に一派独立が認可されたが、教派神道の枠組みを脱することは許されなかった。昭和20年（1945）以降になって、国家神道体制の解体に伴い、それまでの厳しい束縛から解かれ、教祖本来の教えに復元されて、今日に至っている。

天理教の教会は教会本部と一般教会に分かれ、一般教会は教会本部に所属している。一般教会は、日本国内では大教会と分教会を指し、海外では伝道庁、教会を指す²⁶。さらに布教所²⁷は一般教会に所属し、布教活動を行なう。「大教会」は部内教会50ヶ所以上で、「よふほく」のうち教人300名以上の教会である。また「分教会・教会」は「よふほく」16名以上、そのうち教人5名以上、及び信者若干名を有するものである²⁸。ただし韓国の場合、例外的に「現地教会」と称される教会があるが、それは「教会」と呼ばれてはいるが、教会本部の許可を得ていない布教拠点のことである。

25 同上書、445頁。

26 同上書、51頁。

27 教会になっていない布教拠点。

28 同上書、256頁。

2. 韓国における天理教の展開

教祖が「現身をかくした」明治20年（1887）以来、日本国内における天理教の布教活動はより活発になった。そのため、明治政府の天理教に対する監視も厳しくなり、すでに示唆したように明治29年（1896）に、内務省から「訓令・甲第十二号」が發布され、天理教は弾圧を受けるようになった。日本国内での布教活動が困難になったこともあって、海外へ目を向ける布教師が出始めたことは、天理教の韓国布教を促した要因の一つであったと言えるであろう。

ここでは、天理教の韓国布教を大きく三つの時期に分類し、韓国における天理教の歴史的展開を概観しながら、それぞれの時期における特徴をみることにしたい。

2-1. 明治26年（1893）～明治38年（1905）

天理教の韓国への布教は、明治26年（1893）、高知分教会の信者である里見治太郎が釜山（プサン）に渡って布教したのが最初であった。里見は高知出身の信者で、海外布教への強い意思を持ち、単身で釜山へ行って布教をはじめた。日本人の家に寄宿しながら布教活動を行なった里見は、韓国布教が有望であると判断し、高知分教会に布教師の派遣を要請する手紙を送った。里見の手紙を受けた教会関係者は、教会本部の許しを得て二人の布教師を派遣した。正式な韓国布教の始まりである。以後、日本各地から布教師が韓国全土に渡って布教活動を行なうようになった³⁰。このときまでの韓国布教は、布教師個人の情熱によるもの、あるいは教会単位の活動であり、非組織的なものであった。

2-2. 明治38年（1905）～昭和20年（1945）

日露戦争の勝利後、韓国³¹への支配を強化していく政府の政策と相まって、多数の日本人が韓国に渡航した。その中には天理教の布教師も含まれていた。

30 高野友治1975『天理教伝道史X』天理教道友社、2-3頁。

31 明治30年（1897）から明治43年（1910）までは「大韓帝国」、明治43年（1910）から昭和20年（1945）までは「朝鮮」、1945-1948年は米軍政期、1948年から北緯38度線以南側は「大韓民国」と、国名が変更される。便宜上、「大韓帝国」と「大韓民国」は「韓国」と略記する。

明治40年(1907)、韓国に統監府が置かれ、明治41年(1908)、統監府令が出されたため、韓国で活動している布教師を対象に、自治的な取締監督が必要になった。同年11月、一派独立の認可を得た天理教は、本部の役員を派遣し、韓国における布教状況を調査する。派遣された役員は、韓国布教が活発であり、今後有望であると判断した。実情を把握した役員たちは教会本部に連絡を取り、明治42年(1909)、布教師の拠点として「韓国布教管理所」を釜山に設置した³²。

さらに大正8年(1919)、朝鮮人の天理教布教師養成を目的に、「天理教朝鮮教義講習所」が「天理教朝鮮布教管理所」内に開設される。そのときまでの布教は、日本人布教師が日本人と朝鮮人に布教することが主であったが、天理教は早くから朝鮮人布教師による朝鮮人への布教を目指していた。開設当初の記録をみると、教義、講話、おてふり、祝詞、礼典、朝鮮民族史を講義内容とし、6ヶ月の課程を修了すると教師としての資格を与えている。第一期は3人の日本人布教師が修了しているが、徐々に朝鮮人信者を受け入れるようになり、昭和4年(1929)からは、日本人の入学を受けず、朝鮮人の天理教布教師を養成する役割を果たすようになった³³。教勢拡大とともに教団本部主導の組織的布教になっていったのである。

明治43年(1910)、朝鮮における天理教の信者は日本人817名、朝鮮人420名であるが、昭和13年(1938)の資料をみると、日本人33,445名、朝鮮人20,318名である³⁴。この信者数の増加をみれば、朝鮮人布教師を養成して教えを広げようとした天理教は、所期の目的を達成したと言えるであろう。

32 明治43年(1910)8月、日本と韓国が合併することになり、韓国は「朝鮮」と改名された。日韓における国境がなくなり、より多くの日本人布教師が韓国へ渡って活動することになる。したがって、「韓国布教管理所」も「朝鮮布教管理所」と改称した。明治44年(1911)、「朝鮮布教管理所」は布教の便宜上、京城(現ソウル)に移転される。

33 高野友治『天理教伝道史X』、33-34頁。

34 이원범·남춘모2008『한국속 일본계 종교운동의 이해』、25-27頁。

2-3. 昭和20年（1945）～現在

昭和20年（1945）8月³⁵、日本の敗戦とともに米軍政庁が発足し³⁶、在韓日本人の財産所有権は米軍政府に帰属される³⁷。日本人天理教信者が撤収されることによって韓国内天理教信者は減少し、その影響で韓国人信者も信仰を続ける者とそうでないものに分れた。以後の韓国内活動においては、韓国人信者が中心となる。

1948年、信仰を続けた者たちが力を合わせ、貧困層と孤児を助ける社会団体としてソウルに「天鏡修養院」を設立する。当時はまだ、日本と関わりがある宗教は迫害される時期であり、天理教という名称で活動不可能な状況であったからである。

1952年、韓国戦争のため大邱（テグ）に避難中、「天鏡修養院」は「大韓天理教連合会」と改称された。また1953年、休戦とともに「大韓天理教本院」と改称してソウルに再移転した。「大韓天理教本院」は教会本部の介入を受けない自主教団を目指し、「大韓天理教」として独立する³⁸。一方、自主教団を目指す「大韓天理教本院」から離脱し、教会本部との繋がりを重視したグループは「天理教韓国教団」を設立して現在に至る。

「天理教朝鮮布教管理所」は韓国の独立とともに一時的に引き上げた後、1975年から「韓国伝道庁」と再整備されて現在に至る。「天理教韓国教団」の場合、教会本部の直轄機関として韓国の教会を管理する「韓国伝道庁」と、韓国人によって維持・運営される「天理教韓国教団」が並存している（写真1、2参照）。

3. 『道友』（ドウ）にみる入信とそのパターン

ここで取り上げる『道友』は、1970年8月に創刊された「天理教韓国教団」

35 以降の韓国のことに関しては年号を省略する。

36 ポツダム会談（1945）により、北緯38度線を基準に北側はソ連が、南側は米軍が統治することになる。以下においては、現在の韓国のみ扱うことにする。

37 米軍政庁布告第三十三号の発布による。

38 このとき、教会本部が定める教義、儀礼形式、教壇を変更することによって、教会本部より分裂する。



写真1 天理教韓国伝道庁と天理教韓国教団の石碑 (2012年8月19日撮影)



写真2 天理教韓国伝道庁 (2012年8月19日撮影)

の唯一の月刊機関誌である。文書による布教、原典に基づく確な教義理解への基準を提示するために創刊され、現在も発行されている。「教会探訪」は1974年2月から1993年7月まで、69回にわたって不定期に連載されている³⁹。合計65ヶ所の教会と布教所を訪問し⁴⁰、教会長、布教所長を対象にインタビューした内容にもとづいて作成されている。内容としては、話者が入信をとおして、どのように人生を再解釈したかに焦点が当てられている⁴¹。本章では、「教会探訪」の記述を手掛かりに、韓国内天理教信者の入信動機やそのパターンを分析したい。

3-1. 入信動機

まず、入信の動機をみると、65件のうち、病気51件 (77%)、教義7件 (11%)、親譲りの信仰 (二代目信仰者) 4件 (6%)⁴²、結婚1件 (2%)、夫の酒癖1件 (2%)、事業失敗1件 (2%) である (表1参照)。病気による入信が圧倒的に多く、このことは「さづけ」を救済方法とする天理教の信仰を特徴づけていると言えるであろう。

39 年表を見るかぎり、連載が始まった年月と終わった年月に注目し値する出来事はない。

40 同じ教会に重複取材した記事もあり、布教所るとき取材したところに教会になってまた取材したところもある。

41 一定の形式の下に作成されたものではない。

42 二代目信仰者の中、親の宗教的背景というより、病気を治すために入信していると述べたものがあり、その場合は病気による入信として扱った。

表1 入信動機

入信動機	件数	%
病 気	51	77
教 義	7	11
親譲りの信仰	4	6
結 婚	1	2
夫 の 酒 癖	1	2
事 業 失 敗	1	2
総 計	65	100

51件の大多数が重病であり、医薬で治療できず諦めていた状態、あるいは医薬で治療できないがゆえに、信仰の力で治療しようとしているときに天理教の教えを知り、信仰に繋がっている（表2参照）。

表2 入信動機における病気の内容 N=74⁴³

病 名	人 数	病 名	人 数
肺 結 核	8	神 経 衰 弱 症	2
心 臓 病	6	肝 硬 変	1
胃 腸 炎	6	喘 息	1
神 経 痛	5	中 風	1
骨 髄 炎	5	不 妊	1
癌	5	脊 髄 炎	1
精 神 病	4	へ ル ニ ア	1
ハ ン セ ン、病	4	遺 産 後 遺 症	1
ノ イ ロ ー ゼ	3	火 傷 後 遺 症	1
関 節 炎	3	交 通 事 故 後 遺 症	1
高 血 圧	2	悪 性 貧 血	1
脳 膜 炎	2	肝 炎	1
腎 臓 炎	2	子 宮 疾 患	1
盲 腸 炎	2	不 明	1
結核性リンパ腺	2		

入信動機における病気の主体は、51件のうち、本人38件（74%）、家族12件（24%）、知人1件（2%）であり、本人であるか、血縁で繋がる家族の病気を治すために入信した人が多数を占める（表3参照）。

43 一人の話者が複数の病気を同時に持っている場合があるために、全体人数の51を超えている。

表3 病気の主体

主 体	件 数	%
本、人	38	74
家 族	12	24
知 人	1	2
総 計	51	100

夫の酒癖、事業失敗の場合も、個人が自分の力で解決できない問題を克服するために入信したという意味では病気による入信と同じ脈絡であるといえる。教義を聞いて入信している場合、3名が「いんねん」に関する教義に感銘したと語っている⁴⁴。また、他宗教から改宗した人が7名いる⁴⁵。改宗者は全員が病気による入信であり、以前の信仰をとおして病気が治らなかったために、天理教に改宗している⁴⁶。

3-2. 信者の性別と年齢

話者の性別をみると、65名のうち、男性が34名（52%）、女性が31名（48%）であり、信仰初代における性別に偏りはない（表4参照）。しかし、二代目信者の場合、全体8名のうち、男性7名と女性1名であり、全員が世襲によって教会・布教所を受け継いでいる。教会・布教所を受け継ぐ場合、男性中心の血縁関係による世襲が予想される。

表4 話者の性別

性 別	名	%
男	34	52
女	31	48
総 計	65	100

44 4件は不明。

45 キリスト教（宗派不明3件）、カトリック（1件）、仏教（宗派不明3件）。

46 仏教を信じていて「輪廻」の教義を知っていたために、天理教の「生まれ変わり」の教義が分かりやすかったという記述が1件ある。その他、前の信仰が天理教を信仰することに及ぼした影響に関する言及はない。

さらに入信時の年齢をみると、10代が2名（3%）、20代が16名（25%）、30代が25名（38%）、40代が9名（14%）、不明13名（20%）であった（表5参照）。話者全員が教会長、布教所長であることを考えると、20代～40代に入信して布教活動を行ない、教会、布教所を設立している人が多い。50代以上の入信者が一人もいないことは注目に値するが、今回の調査資料の中に事例がないために分析することはできない。10代と20代を合わせると、全体の28%ではあるが、30代のみで38%、さらに40代が14%であり、青年層より中年層の入信者が多数を占めている。

表5 入信時の年代区分

年 代	人	%
10 代	2	3
20 代	16	25
30 代	25	38
40 代	9	14
不 明	13	20
総 計	65	100

3-3. 入信の動機と経緯

天理教と繋がった後、信仰の深化を促した教義には、主に次の三つが挙げられている⁴⁷。まず、人生における諸問題が生じる原因は、前生・今生で積んできた「個人のいんねん」に起因することが分かったというもので、39件あった。悪い「いんねん」を切り、教義に基づく善行をとおして善い「いんねん」へと変えることに帰結する。天理教の教義で説かれる「いんねん」を自覚することによって、「個人のいんねん」を善い方向へと変え、親神と人間がともに楽しむ「陽気ぐらし」世界の実現という目標に向かうことをめざす。とりわけ、諸問題を抱えて入信している場合、問題の原因は「個人のいんねん」にあると解釈される記事内容が多い。次に「かしのもの・かりもの理」⁴⁸を信じるようになった

47 1件は「いんねん」の話と「人を救ってわが身救すかる」の話の両方で重複する話があった。

48 人間の身体は神が貸しているものであり、人間は身体を親神から借りているという意味。

たという話が6件あった。「かしもの・かりものの理」の自覚によって、親神への報恩という形で信仰実践を行なうことになる。最後に、「人を救けてわが身救かる」という教義を信じるようになったという話が5件あった。自分のためだけに生きるのではなく、他者のために生きることによって、自分の「いんねん」が善くなり、本来的な生き方ができるといふ。

布教を始めた動機としては、上級教会長の助言20件（30%）、本人の意思27件（43%）、不明18件（27%）であった。本人の意思の具体的な内容は、親神への報恩7件（11%）、教祖の「ひながた」を辿る3件（5%）、入信時の問題解決のため2件（3%）⁴⁹、事業失敗1件（2%）、親神による夢の中での教示1件（2%）であった（表6参照）。入信から布教するに至るまでの過程において、信仰の深化とともに自己中心的な考え方から親神・教祖という信仰対象、あるいは上級教会長という信仰の指導者を考えの中心に置くように移行しているといえる。

表6 布教動機

布 教 動 機	件 数	%
上級教会長の助言	20	30
本人の意思	27	43
布教への願望	(13)	(20)
親神への報恩	(7)	(11)
教祖のひながたを辿る	(3)	(5)
入信時の問題解決	(2)	(3)
事業の失敗	(1)	(2)
親神の教示（夢）	(1)	(2)
不明	18	27
総 計	65	100

それゆえに、人間は親神の恩恵に気づき、報恩感謝することが肝心であるとされる。人間は自分の力によって生きるのではなく、親神の守護によって生かされて生きているという教義（天理大学おやさと研究所編『改訂天理教事典』、202-203頁）。

49 従来の信仰実践をとおして病気が治らなかったために、信仰実践の強度を高めて病気を治すために布教に出ている（2件同様）。

個人の入信過程において、「危機的状況」が訪れた時期によって分類すると、以下のようなになるであろう⁵⁰。

タイプ① 危機的状況→情報受信→教会への参拝→

いんねんの自覚→信仰の確立

タイプ② 情報受信→教会への参拝→危機的状況→

教会への参拝→いんねんの自覚→信仰の確立

タイプ①は65件のうちに51件（79%）を占め、「危機的状況」を介して入信した人が圧倒的に多い。直面している問題を解決するために入信した人が多数であることが確認できる。特に他宗教から改宗した人の全員（7件）が「危機的状況」を克服するために、以前の信仰から天理教に改宗している。しかし、問題を抱えた時期から信仰の確立までにかかった歳月は、それぞれ異なる傾向にあった。次にタイプ②は10件（15%）を占めていた。10件の中には、参拝後信仰していなかったが、新たに人生における諸問題が生じることによって入信に繋がる場合と、信仰を続けている中で問題を抱える場合があった。いずれにせよ、抱えている問題の解決とともに、「いんねんの自覚」をとおして「信仰の確立」の段階に至ることに変わりはない⁵¹。

おわりに

以上、天理教の教義と信仰、および韓国における天理教の歴史的展開を予備的に考察した後、韓国の天理教の機関誌に掲載された記事をおもに手掛かりとして、天理教の信仰者たちが入信時に抱えた諸問題あるいは人生の意味を、入信とともにいかに意味づけ、克服していったのかを考察してきた。

記事の内容を分析すると、個人は自分自身やごく近い家族の病気をはじめとして、主に人生における困難な諸問題、教義への関心、家族の影響、結婚などの要因によって天理教と接していることが明らかになる。日常的な生活の場面

50 入信過程に関する鈴木岩弓の分類方法については、鈴木岩弓1995『『首無地蔵』信仰の展開構造』『宗教研究』（第306号）日本宗教学会、186頁を参照。

51 4件は不明。

において、具体的な生の問題に直面するとき、それらは個人にとって入信しやすい要因となっていると言えるであろう。また天理教において説かれる教義の中でも、親神による人間創造の目的としての「陽気ぐらし」、すなわち「元のいんねん」の自覚、および前生・今生・来生へと受け継がれる、「心の道」としての個人の「いんねん」の自覚が、韓国の天理教における入信において、生の意味を再解釈するうえで重要な要因になっていることは興味深い点であろう。教義と信仰による生の意味解釈は、個人にとっての苦難を親神の「てびき」として受け入れ、また「個人のいんねん」を積極的に変えると同時に、「陽気ぐらし」世界の実現を自己の生の目標として据える役割を果たす。人生の意義を「親神への報恩」という志向性に結びつけるのである。このように「いんねんの自覚」こそ、韓国の天理教信者における入信過程の中で最も重要な要素であると言えるであろう。

ただし、ここでの「入信」の過程に関する分析は、資料の調査対象がほぼ信仰初代に限られているという問題を孕んでいる。とりわけ、親譲りの信仰が多い天理教の伝統の中では、二代目以降の信仰者が初代の信仰者と異なる信仰の深化へのプロセス、すなわち実質的な「入信」の過程を経ることが考えられる。こうした点に関する考察については、今後の研究課題としたい。

参考文献

- 李元範・櫻井義秀編2011『越境する日韓宗教文化』北海道大学出版会。
- 井上順孝1985『海を渡った日本宗教』弘文堂。
- 井上順孝・島蘭進1985「回心論再考」上田閑照・柳川啓一編『宗教学のすすめ』筑摩書房。
- 井上順孝他編1990『新宗教事典』弘文堂。
- 澤井義次2011『天理教教義学研究』天理教道友社。
- 鈴木岩弓1995「『首無地蔵』信仰の展開構造」『宗教研究』（第306号）日本宗教学会。
- 高野友治1981『天理教伝道史X』天理教道友社。

- 武井順介2009「新宗教教団における体験談の諸相」『立正大学社会学論叢』（第8号）立正大学社会学会。
- 徳田幸雄2007「訳語『回心』のルーツと展開」『東北宗教学』（第3号）東北大学宗教学研究室。
- 天理教韓国伝道庁2010『稿本天理教韓国伝道庁史年表』研文印刷出版社。
- 天理教教会本部編2001（1956）『稿本天理教教祖伝』天理教道友社。
—————2001（1963）『稿本中山眞之亮伝』天理教道友社。
—————2009（1949）『天理教教典』天理教道友社。
- 天理大学おやさと研究所編1997『改訂天理教事典』天理教道友社。
- 諸井慶徳1964『天理教の神観と人間観』天理教道友社。
- 韓哲曦1988『日本の朝鮮支配と宗教政策』未来社。
- 朴己出1977『韓国政治史』文化堂。
- 文化庁編2012『宗教年鑑』ぎょうせい。
- 渡辺雅子2007『現代日本新宗教論』御茶の水書房。
- 이원범편저2007『한국 내 일본계 종교운동의 이해』제이앤씨。
- 이원범・남춘모2008『한국속 일본계 종교운동의 이해』대왕사。

The process of *Nyu-shin* with a Tenrikyo in Korea

— The case of the article in a monthly journal —

Jonghyun JIN

As is generally known, the concept of “conversion” is derived from Western contexts, and most of the case, it has a background of Christian culture even though a results of a study or a researcher. Therefore, there is a different pattern between Christianity belonged Western culture and Tenrikyo a kind of Japanese New Religious movement belonged Eastern culture.

This paper deals with a *Nyu-shin* that the concept of Tenrikyo which is classified one of the Japanese new religious movements in Korea. First, I simply make a survey of Tenrikyo’s basic concept and worldview. Second, I separate a development of Tenrikyo in Korea at three, and make a point each era’s distinction. Third, I paid attention to the case of the article in a monthly journal “Dow” and analyze a *Nyu-shin* process in the article.

Tenrikyo is a first religion of Japanese New Religious movement spreads own teaching in Korea. And from early years Tenrikyo educates Korean for making a propagator of teachings. Moreover, end of the colonial period by Japan, Tenrikyo is restructured by Korean believers and expanded religious organization. However, there are a lot of difficulties by a deep-rooted anti-Japanese sentiment. Based in this situation, I would like to clear the main point of *Nyu-shin* process of Tenrikyo in Korea.